Short ショートコメント ★★★

ドミノ

2023 年／アメリカ映画
配給：ギャガ、ワーナー・ブラザース映画／94 分

2023（令和 5）年 11 月 4 日鑑賞　TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２３－１３３

監督・脚本・原案：ロバート・ロドリゲス
出演：ベン・アフレック／アリシー・ブラガ／ウィリアム・フィクナー／J・D・パルド／ダイオ・オケニイ／ジャッキー・アール・ヘイリー／ハラ・フィンリー

みどころ

ロバート・ロドリゲス監督が脚本・原案を書いた本作の“売り”は、“冒頭 5 秒、既に騙されている。”しかし、“ヒプノティック”（＝他人の脳を自由に操ることができる能力）の使い手たちを巡るストーリーは極めて難解だ。

キアヌ・リーブス主演の人気シリーズ『マトリックス』を彷彿させる（？）、「かつてないギミック！かつてないラスト！かつてない映像体験！」は興味津々。また、「ロバート・ロドリゲスの仕掛ける多重構造のストーリー&世界観。想像は、必ず覆される」ストーリーも起伏に富んでいる。

しかし、そんな映画が好きか嫌いかは、あなた次第。私はこんな映画は、基本的にノーサンキューだから星 3 つにしたが、さてあなたは・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作の邦題は『ドミノ』。そう聞くと、誰でも「ドミノ倒し」のことを連想するが、本作の原題は『HYPNOTIC』。しかし、ヒプノティックって一体ナニ？チラシには「冒頭 5 秒、既に騙されている。」「かつてないギミック！かつてないラスト！かつてない映像体験！」「構想 20 年、ロバート・ロドリゲスの仕掛ける多重構造のストーリー＆世界観。想像は、必ず覆される」と書かれているが、それってナニ？

本作を監督したロバート・ロドリゲス監督は 2002 年に本作のストーリーに着手し、長い間ヒッチコック的スリラーを作ろうと考えていたが、『HYPNOTIC』というタイトルを思いついたところから、10 分もしないうちに物語の軸を思いついたそうだ。それは「存在にすら気づかないうちに、欲しいものを何でも奪って立ち去る悪役の話だった」が、現実に映画が完成するまでには、その後、さまざまな紆余曲折があったらしい。

◆私は本作と同じ日に『ザ・クリエイター　創造者』（23 年）を観た。同作は、2060 年代の近未来において、「人間が作り出した AI と人間との対立」をテーマにした面白い映画だった。それに対して本作は、「圧倒的な超能力で相手の脳を支配できる」という

「HYPNOTIC」がテーマだ。ヒプノティックとは、「国防のため、米国政府の秘密プログラム“機関（ディヴィジョン）”が開発したもの」で、圧倒的な超能力で相手の脳を支配するもの、だというから恐ろしい。

◆本作冒頭、刑事のダニー・ローク（ベン・アフレック）が相棒のニックス（J・D・パルド）と共に、銀行強盗犯を支配する男（ウィリアム・フィクナー）を追い詰めたが、そこには“ある異変”が！その後、ロークが、ニックスの協力で強盗計画の通報者である場末の占い師の女性ダイアナ・クルーズ（アリシー・ブラガ）の下を訪れ、“あの男”のことを質問すると、「この男こそ、他人の脳を支配するヒプノティックの使い手の男、レブ・デルレーンだ」と説明されたから、ビックリ！デルレーンは最強のヒプノティックの持ち主で、相手は意識のないまま死ぬまで操られるらしい。しかし、そんな人間ってホントにいるの？また、そんな世界ってホントにあるの？他方、そんなテーマの本作の邦題が、なぜ『ドミノ』とされたの・・・？

◆日本の政界では、岸田総理が打ち出した減税を含む“経済対策”にもかかわらず、岸田政権の支持率の下落が続いている。そして、11 月 13 日には財務副大臣が辞任した（更迭された）が、「政務三役」の辞任は、第 2 次岸田再改造内閣が 9 月に発足してから 3 人目だから、“政権のたが”が緩んでいると言われても仕方がない。この“辞任ドミノ”が政権を打撃する痛手になったのは当然だが、11 月 15 日から訪米し、習近平国家主席との日中首脳会談で“外交の岸田”と言われる手腕を発揮し、状況を挽回できるの？私の目には到底ムリとしか思えないが・・・。

他方、本作で描かれるのは、脳をハッキングすることによって成立する「ドミノ計画」の全貌だが、ある日、ダイアナと共にデルレーンと対峙したロークは、自分にもヒプノティックの能力があることを知ってビックリ！主人公本人ですら自分が何者であるかわからないほど騙されていたのだから、観客が「冒頭 5 秒、既に騙されている。」のは当然だ。

◆なぜ、ロークがヒプノティックを使うことができるの？本作後半からは、ダイアナの友人（？）である天才ハッカーのリバー（ダイオ・オケニイ）も登場し、その秘密に迫っていくことになる。そして、そこでは何と、ロークの妻ビビアンが「機関」のエージェントだったという衝撃の事実が明かされるうえ、娘ミニーことドミニク（ハラ・フィンリー）が“ドミノ”と呼ばれる最強レベルのヒプノティックの能力者であったことも明かされてくるので、ビックリ！ビックリ！こりゃ、一体どうなってるの？

冒頭 5 秒で騙されてしまっている私には、これ以上の解説はできないので、『ドミノ』と題された“本作のエッセンス”は、あなた自身の目でしっかりと。

2023（令和 5）年 11 月 14 日記